



半七捕物帳 08

# 帯取りの池

岡本綺堂



青空文庫



青空  
文庫

「今ではすっかり埋められてしまつて跡方も残つていませんが、ここが昔の帯取りの池というんですよ。江戸の時代にはまだちゃんと残つていました。御覧なさい。これですよ」

半七老人は万延版の江戸絵図をひろげて見せてくれた。市ヶ谷の月桂寺の西、尾州家の中屋敷の下におびとりの池という、かなり大きな池が水色に染めら

れてあつた。

「京都の近所にも同じような故蹟があるそうですが、江戸の絵図にもこの通り記しるしてありますから嘘じゃありません。この池を帯取りというのは、昔からこういう不思議な伝説があるからです。勿論、遠い昔のことでしょうが、この池の上に美しい錦の帯が浮いているのを、通りがかりの旅人などが見付けて、それを取ろうとしてうっかり近寄ると、忽ちその帯に巻き込まれて、池の底へ沈められてしまふんです。なんでも池のぬしが錦の帯に化けて、通りがかりの人間をひき寄せ

るんだと云うんです」

「大きい錦蛇でも棲んでいたんでしよう」と、わたしは学者めかして云った。

「そんなことかも知れませんよ」と、半七老人は忤さからわずにうなずいた。「又ある説によると、大蛇が水の底に棲んでいる筈はない。これは水練に達した盗賊が水の底にかくれていて、錦の帯をおとり往來の旅人を引き摺り込んで、その懐中物や着物をみんな剥ぎ取るのだらうと云うんです。まあ、どつちにしても気味のよくない所で、むかしは大変に広い池であつたのを、江戸時

代になつてだんだん狭められたのだそうで、わたくしどもの知つていている時分には、岸の方はもう浅い泥沼のようになつて、夏になると葦などが生えていました。それでも帯取りの池という忌な伝説が残つていて、泳ぐですから、誰もそこへ行つて魚を捕る者も無し、泳ぐ者もなかつたようでした。すると或る時、その帯取りの池に女の帯が浮いていたもんだから、みんな驚いて大騒ぎになつたんですよ」

それは安政六年の三月はじめであつた。その年は余

寒が割合に長かったせいか、池の岸にも葦の青い芽がまだ見えなかつた。ある時、近所のものが通りかかる、と、岸の浅いところに女の派手な帯が長く尾をひいて、まん中の水の方まで流れているのを発見した。これが普通の池でも相当の問題になるべき発見であるのに、まして昔から帯取りの池という奇怪な伝説をもっている此の池に女の美しい帯が浮かんでいるのであるから、その噂はそれからそれへと伝わって、勿ち近所の大評判となつたが、うっかり近寄つたらどんなに恐ろしい目に遇うかも知れないという不安があるので、臆病な

見物人はただ遠いほうから眺めているばかりで、たれも進んでその帯の正体を見とどける者がなかった。

そのうちに尾州家から侍が二、三人出て来た。かれらは袴の股立ちももだを取つて、この泥ぶかい岸に降り立つて、疑問の帯をずるずると手繰たぐりあげたが、帯は別に不思議の働きをも見せないで、濡れた尾をひき摺りながら明るい春の下にさらされた。帯は池の主ぬしではなかった。やはり普通の若い女が締める派手な帯で、青と紅とむらさきと三段に染め分けた縮緬ちりめん地に麻の葉模様が白く絞り出されてあつた。



「誰がこんなところへ捨てて行つたんだらう」

それが第二の疑問であつた。帯はまだ新しい綺麗なもので、この時代でも売れば相当の値になるものを、誰が惜し気もなく投げ込んで行つたものか、それに就いてはいろいろの想像説があらわれた。ある者は盗賊の仕業しわざであろうと云つた。盗賊がどこから盗み出して来たのを、邪魔になるので捨てたのか、或いは後の証拠になるのを恐れて捨てたのか、おそらくは二つに一つであろうとのことであつた。又ある者は誰かのいたずら悪戯であろうと云つた。ここが帯取りの池ということ

を承知の上で、世間の人を騒がすためにわざとこんな帯を投げ込んだものであろうとのことであつた。併しそんな悪戯はもう時代おくれで、天保以後の江戸の世界には、相当の物種ものだねをつかつて世間をさわがせて、蔭で手をうって喜んでゐるような悠長な人間は少なくなつた。したがつて、前の説の方が勢力を占めて、これはきつと盗賊の仕業に相違ないということに決められてしまつた。

併しその盗賊は判らなかつた。その被害者もあらわれて来なかつた。疑問の帯は辻番所にひとまず保管さ

れることになつて、そのまま二日ふつかばかり経つと、ここにまた思いも寄らない事実が発見された。その帯の持主は、市ヶ谷合羽坂下かっぱざかの酒屋の裏に住んでいるおみよ、という美しい娘で、おみよは何者にか絞め殺されていたのであつた。そう判ると、又その評判が大きくなつた。

おみよは今年十八で、おちかという阿母おふくろと二人で、この裏長屋にしもたや暮しをしていた。長屋といつても、寄付きをあわせて四間ほどの小綺麗な家で、ことに阿母は近所でも評判の綺麗好きといふので、格子な

どはいつもぴかぴか光っていた。併しこの母子おやこが誰の仕送りで、こうして小綺麗に暮しているのか、それは近所の人達にもよく判らなかつた。おみよの兄という人が下町したまちのある大店おおだなに勤めていて、その兄の方から月々の仕送りを受けているのだと母のおちかは吹聴ふいちようしていたが、その兄らしい人が曾かつて出入りをしたこともないので、近所ではそれを信用しなかつた。おみよは内証で旦那取りをしているらしいという噂が立つた。おみよの容貌きりようが好いだけに、そういう疑いのかかるのも無理はなかつたが、母子は別にそれを気にも止めな

いふうで、近所の人達とは仲よく付き合っていた。

帯取りの池におみよの帯が浮かんでいた其の前の日の朝、この母子は練馬の方の親類に不幸があつて、泊りがけでその手伝いに行かなければならないと云つて、近所の人達に留守を頼んで出て行つた。表の戸には錠をおろして行つたので、誰も内を覗いて見る人もなかつたが、それからあしかけ四日目に阿母が一人で帰つて来た。両隣りの人に挨拶して、やがて格子をあけてはいつたかと思うと、たちまち泣き声をあげて転ころげ出して来た。

「おみよが死んでいます。皆さん、早く来ててください」

近所の人達もおどろいて駆け付けると、娘のおみよは奥の六畳間に仰向けさまに倒れていた。それを聞いて家主も駆け付けた。やがて医師も来た。医師の診断によると、おみよは何者かに絞め殺されたのであった。更に不思議なことは、おみよは阿母と一緒に家を出た時と同じ服装みなりをしているにも拘らず、その麻の葉の帯が見えなかった。彼女をまず絞め殺して置いて、それからその死体を適當の位置に据え直して行ったことは、その死にざまのちつとも取り乱していないのを見ても

さとられた。

「おみよさんがいつの間にも帰って来たんだらう」

それが第一に判らなかつた。おちかの説明によると、その日練馬へゆく途中で、娘のすがたが急に見えなくなつた。勿論その前から練馬へゆくのをひどく忌いやがつていたから、途中でおふくろを撒まいて逃げ帰つたのであろうと、おちかは推量した。先をいそぐ身は今更引つ返して詮議もならないので、彼女は娘をそのままにして先方へ行つた。通夜やら葬式やらに三日ばかりの暇を潰して、四日目のけさ早くに練馬を発つて、

たつた今帰りついて見ると表の錠は外はずれていた。案の通り、娘は先に帰っているものと思つて、格子をあけてはいると内は昼でも真つ暗であつた。口小言を云いながら窓をあけると、まず眼にはいったものは娘の浅ましい亡骸なきがらで、おちかは腰のぬけるほど驚いたのであつた。

「何がなにやら一向に判りません。わたくしはまるで夢のようでございます」と、おちかは正体もなく泣き崩れていた。

近所の人達も夢のようであつた。おみよがいつの間



に帰つて来て、いつの間に殺されたか、両隣りの者すらも気がつかなかつた。それにしてもおみよの帯を誰が解いて行つたかと詮議の末に、それがおとといの朝、かの帯取りの池に浮かんでいたということが初めて判つた。おちかもその帯を見て、これは娘の物に相違ないと泣きながら証明した。して見ると、何者かがおみよを絞め殺して、その帯を解いて抱え出して、わぎわぎ帯取りの池へ投げ込んだものであろう。しかし、なんの為に彼女の帯を解いたか、慾の為ならばこの家内にもつと金目の品は幾らもある。彼女の帯ばかりで

なく、着物をも剥はいで行きそうなものであるのに、単に帯ばかりに眼をつけて、しかも場所をえらんで、それを帯取りの池へ沈めたというには何か深い仔細がなければならぬ。まさかに池の主が美しいおみよを魅みこんだ訳でもあるまい。どう考えても、この疑問がまだ容易に解けそうもなかった。

こうなると近所迷惑で、長屋中のものはみな自身番の取り調べをうけた。取り分けて母のおちかは、自分が娘を絞め殺して置いて、わざと家を留守にしていたのではないかという疑いをうけて、そのなかでも一番

嚴重に吟味されたが、おちかは全くなんにも知らない  
と云い張った。近所の人達も母子が二人づれで出て行  
くところを見とどけたと証明した。ことにこの母子は  
ふだんから仲好しで、おふくろが娘を殺すような理由  
は誰の眼にも発見されなかつた。帯取りの池の秘密は  
そのおそろしい伝説と同じように、いつまでも疑問の  
ままで残されていた。

## 二

それから七日ばかりの後の夜であつた。手先の松吉が神田三河町の半七の家へ威勢よく駆け込んで来た。

「親分、知れましたよ。あの帯取りの一件が……。近

所の評判に嘘はねえ、おみよという女はやつぱり旦那取りをしていたんですよ。相手はなんでも旗本の隠居で、こつちから時々こそつと通つていたんです。おふくろは頻りに隠していたんですけれど、わっしがいろ

いろ嚇しつけて、とうとうそれだけの泥を吐かせて来たんですが、どうでしょう、それが何かの手がかりになりますまいか」

「むむ、それだけでも判ると、だいぶ見当がつく」と、半七はうなずいた。「おふくろを嚇かして来たんじやあ、あんまり手柄にもならねえが……。ひよろ松、まあ手前にしちやあ上出来のほうだ。おとなしそうに見えていても、旦那取りをするような女じゃあ、ほかにも又いろいろの紛糾こんごうがあるだろう。そこで、お前はこれからどうする」

「さあ、それが判らねえから相談に来たんです。まさかその旗本の隠居が殺したんじやありませんか。親分はどう思います」

「おれもまさかと思うが……」と、半七は首をひねった。「だが、世間には案外なことがあるからな。なかなか油断はできねえ。その旗本はなんという屋敷で、隠居の下屋敷はどこにあるんだ」

「屋敷は大久保式部という千石取りで、その隠居の下屋敷は雑司ヶ谷にあるそうです」

「じゃあ、なにしろその雑司ヶ谷というのへ行つて見

ようじやあねえか。飛んでもねえものに突き当るかも知れねえ」

あくる朝、松吉の誘いに来るのを待つて、半七は二人づれで神田を出た。きようは三月なかばの花見日びより和といううらかな日で、ぶらぶら歩いている二人のひたいには薄い汗がにじんだ。雑司ヶ谷へゆき着いて、大久保式部の下屋敷をたずねると、さすがは千石取りの隠居所だけに屋敷はなかなか手広そうな構えで、前には小さい溝川どぶがわが流れていた。

「まるで一軒家ですね」と、松吉は云った。

なるほど背中合わせに一軒の屋敷があるだけで、右も左も広い畑地であつた。近所で訊くと、この下屋敷には六十ばかりの御隠居が住んでいて、ほかには用人と若党と中間ちゆうげん、それから女中が二人ほど奉公しているとのことであつた。半七は菜の花の黄いろい畑のあいだを縫つて、屋敷の横手を一と通り見まわした。

「屋敷の奴が殺やつたんじゃあるめえな」

「そうでしようか」

「これだけの広い屋敷だ。おまけに近所に遠い一軒家も同様だ。妾をやつつける気があるなら、屋敷の中で



やつつけるか、帰る途中をやつつけるか、何もわざわざ当人の家まで押し掛けて行くには及ばねえ。誰が考えてもそうじゃねえか」

「そうですねえ。じゃあ、きょうは無駄足でしたか」と、松吉は詰まらなそうな顔をしていた。

「だが、まあいいや、久し振りでこつちへ登つて来たから、鬼子母神様きしぼじんへ御参詣をして、茗荷屋みょうがやで昼飯でも食おうじゃねえか」

二人は田圃路たんぼをいきぬけて、鬼子母神前の長い往来へ出ると、ここらの気分を象徴するような大きいけやき櫟の

木肌が、あかるい春の日に光っていた。天保以来、参詣の足が少しゆるんだとはいいいながら、秋の会式えしきについて、春の桜時はここもさすがに賑わって、団子茶屋うちわにうちわ団扇の音が忙がしかつた。すすきの木菟みみずくは旬しゅんはずれで、この頃はその尖ったくちばしを見せなかつたが、名物の風車は春風がそよそよと渡つて、これも名物の巻藁おいらんにさしてある笹の枝に、麦藁の花魁おいらんがあかい袂を軽くなびかせて、紙細工の蝶はねの翅がひらひらと白くもつれ合っているのも、のどかな春らしい影を作っていた。ふたりは櫻と桜の間をくぐって本堂の前に立った。

「親分、なかなか御参詣があるねえ」

「花どきだ。おれたちのような浮気参りもあるんだろ  
う。折角来たもんだ。よく拝んでいけ」

松吉もまじめになつて拝んだ。名代なだいの藪蕎麦やぶそばや

向畊亭こうこうていはもう跡方もなくなつたので、二人は茗荷屋へ  
午飯を食いにはいった。松吉は酒をのむので、半七も

一、二杯附き合つた。二人はうす紅い顔をして茶屋を  
出ると、門口かどぐちで小粋なふうをした二十三四の女に出

逢つた。女は妹らしい十四五の小娘をつれて、桐屋の  
飴の袋をさげていた。小娘は笹の枝につけた住吉踊り

の麦藁人形をかついでいた。

「あら、三河町の親分さん」と、女は立ち停まつて愛想のいい笑顔をみせた。

「御信心だね」と、半七も笑つて会釈えしやくすると、小娘も笑つて挨拶した。

「お前たちもお午飯ひるかえ。もう少し早いとお酌でもして貰うものを、惜しいことをしたつけな」と、半七はまた笑つた。

「ほんとうに残念でございますね」と、女も笑つた。  
「妹と二人で家をあげちやあ困るんですけれど、きよ

うはよんどころない御代参を頼まれたもんですからね。一人で二つ願つちやあ、あんまり慾張っているようにでもつたい勿体のうござんすから、自分は自分、妹は御代参と、こう役割を決めてまいりました」

「これが病気とでもいうのかえ」

松吉は親指を出してみせると、女は肩を少しそらせて笑った。

「ほほ、御冗談でしょう。可哀そうにこれでもまだお嫁入り前でさあね。御代参をたのまれたのは、町内の古着屋のおつかさんに……。と云い訳をするのも野暮

ですが、そのの妹があたしのところへお稽古に来るもんですから」

「じゃあ、そのおつかさんも御信心なんだね」と、半七は何の気もつかずに云った。

「御信心も御信心ですけれど、すこし心配事がありましてね。そのの息子さんが十日ばかりも前から、どこ

へ行つてしまつたか判らないんですよ。方々の卜者うらないに

みて貰つたら、劍難があるの、水難があるのと云われたそうで、おつかさんはなおなお苦勞しているんです。

今もお堂で御神籤おみくじを頂いたんですが、やつぱり凶と出

たので……」と、女は苦勞ありそうに細い眉を寄せた。女は内藤新宿の北裏に住んでいる杵屋きねやお登久という師匠であつた。かれは半七や松吉の商売を識つていたので、ここで遇つたのを幸いに、もしその古着屋の息子のゆくえに就いて、なにか心当りでもあつたら知らしてくれと頼んだ。半七はこころよく受け合つた。

「なにしろ、おつかさんが可哀そうですからね」と、お登久は同情するよう云つた。「妹はまだ子供ですし、稼ぎ人にいなくなられちゃあ、どうにもしようがないんです」

「そりやあ気の毒だね。一体その息子はなんと  
いう男で、年は幾つぐらいだね」

半七に訊かれて、お登久は詳しくその息子の身の上  
を話した。彼は千次郎と行って九つの春から市ヶ谷  
合羽坂下の質屋に奉公していたが、無事に年季を勤め  
あげて、それから三年の礼奉公をすませて、去年の春  
から新宿に小さい古着屋の店を出して、おふくろと妹  
と三人暮しで正直に稼いでいる。年は二十四だが、色  
白の小作りの男で、ほんとうの暦よりは二つ三つぐら  
いも若く見えるとのことであつた。その話を聴きなが



ら半七は師匠の顔色をじつと窺っていたが、相手に云うだけのことを云わせてしまつて、しずかにこう云い出した。

「そこで、師匠。云うまでもねえこつたが、その千次郎という息子は早く探し出さなけりやあ困るんだらうね」

「ええ。一日でも早い方がいいんです。くどくも申す通り、おつかさんがひどく心配しているんですから」と、お登久はすがるように頼んだ。うす化粧をした彼女の顔に、不安の暗い影がありありと浮かんでいた。

「じゃあ、もう少し深入りして訊きてえことがあるんだが、師匠はどうせここへはいるつもりなんだろうから、おれ達も付き合ってもう一度引つ返そうじゃねえか」

「でも、それじゃあんまりお気の毒ですから」

「なに、構わねえ。さあ、おれが案内者になるぜ」

半七は先に立って、茗荷屋へ再びはいった。好い加減に酒や肴をあつらえて、お登久と妹に飯を食わせてやったが、やがて時分を見て彼はお登久を別の小座敷へ連れて行った。

「ほかじやあねえが、今の古着屋の息子の一件だが……。おめえも俺にたのむ以上は、なにもかも打明けてくれねえじやあ、どうも水つぽくて仕事がしにくいんだが……」

にやにや笑いながらその顔をのぞき込まれて、お登久は少し酔っている顔をいよいよ紅くした。彼女は小菊の紙でくちびるのあたりを掩いながら俯向いていた。「おい、師匠。野暮に堅くなっているじやあねえか。さつきからの口ぶりで大抵判っているが、おめえは行く行くその古着屋の店へ坐り込んで、一緒に物尺をいものさし

じくる積りでいるんだろう。ねえ、年が若くって、男が悪くなくって、正直でよく稼ぐ男を、亭主にもって不足はねえ筈だ。まあ、そうじゃあねえか。おめえは芸人、相手は町人、なにも御家の御法度ごはつとを破ったという訳でもねえから、そんなに怖がって隠すこともあるめえ。いよいよよという時にやあ、俺だって馴染み甲斐に魚っ子の一尾いっぴきも持つてお祝いに行こうと思つてゐんだ。惚気のろけがまじつても構わねえ、万事正直に云つて貰おうじゃねえか。おらあ黙つて聞き手になるから」

「どうも相済みません」

「済むも済まねえもあるもんか。そりやあそつち同士の芝居だ」と、半七は相変らず笑っていた。

「そこで、その千次郎という男は、無論に師匠ひとりを大切に守っているんだらうね。無暗に食い散らしをするような浮気者じゃあるめえね」

「それがどうも判りませんの」と、お登久は妬ねたましそうに云った。「確かな手証は見とどけませんけれど、合羽坂の質屋にいた時分から何か引つ懸りがあるように思われるので、あたしは何だか好い心持がしないもんですから、時々それをむずかしく云い出しますと、いい

え決してそんなことはない、どこまでもしらを切つて  
いるんです」

千次郎は夜泊りなどをする様子はない。商売用のほかに方々遊びあるく様子もない。合羽坂にいるときから鬼子母神様が信仰で、月に二、三度はかならず参詣に来る。その以外には何の怪しい廉かどもないが、たった一度、女の手紙らしいものを持っていたことがある。勿論、見付けられると同時に、千次郎はすぐ破つてしまつたので、自分はその文句を読んだことはないが、その以来注意して窺っていると、彼はなんだか落ち着

かないところがある。自分に対して何か隠し立てをしていることがあるらしい。それが面白くないので、半月ほど前にも自分は彼と喧嘩をした。そうして、是非ともすぐに女房にしてくれと迫ったこともある。それから間もなく、彼は姿を隠したのであった。

「そうか。そいつあいけねえな」と、半七もまじめにうなずいた。「だが、師匠。おふくろに苦勞させるのが可哀そうだからなんて、うまくおれを担かつごうとしたね。おめえもずいぶん罪が深けえぜ。おぼえているが好い。はははははははは」

お登久は真つ紅になって、  
初心うぶらしく小さくなつて  
いた。



お登久の姉妹きょうだいに土産の笹折を持たせて帰して、半七はまだ茗荷屋に残っていた。

「やい、ひよろ松。犬もあるけば棒にあたるとはこの事だ。雑司ヶ谷へ来たのも無駄にやあならねえ。合羽坂の手がかりが少し付いたようだ。女中をちよいと呼んでくれ」

松吉が手を鳴らすと、年増としまの女中がすぐに顔を出し

た。

「どうもお構い申しませんで、済みません」

「なに、少しお前に訊きたいことがある。もとは市ヶ谷の質屋の番頭さんをしていた千ちゃんという人が、時々ここへ遊びに来やあしねえかね」

「はあ。お出でになります」

「月に二、三度は来るだろう」

「よく御存じでございますね」

「いつも一人で来るかえ」と、半七は笑いながら訊いた。  
「若い綺麗な娘と一緒にじゃあねえか」

女中は黙って笑っていた。併しだんだんに問いつめられて、彼女はこんなことをしゃべった。千次郎は三年ほど前から、毎月二、三度ずつその若い綺麗な娘と連れ立って来る。昼間来ることもあれば、夕方に来ることもある。現に十日ほど前とおかにも、千次郎が先に来て待っているひると、午頃ひるになつて娘が来て、日が暮れるころ一緒に帰つたとのことであつた。女中たちのいる前では、二人とも恥かしそうな顔をしてちつとも口を利かないので、誰もきようまでその娘の名を知らないと彼女は云つた。

「十日ばかり前に来たときに、その娘は麻の葉絞りの紅い帯を締めていなかったかね」と、半七は訊いた。

「はあ、たしかにそうでございましたよ」

「いや、ありがとう。姐ねえさん、いずれまたお礼に来るぜ」

幾らか包んだものを女中にやって、半七は茗荷屋の門かどを出ると、松吉もあとから付いて来てささやいた。

「親分、なるほどちつとは当りが付いて来たようですね。なにしろ、その千次郎という野郎を引き挙げなけりやあいけますめえ」

「そうだと、半七もうなずいた。「だが、素人しろうとのことだ。いつまで何処に隠れてもいられめえ、ほとぼりの冷めさた頃にやあ、きつとぶらぶら出て来るに違えねえ。てめえはこれから新宿へ行つて、その古着屋と師匠の家の近所を毎日見張っている」

「ようがす。きつと受け合いました」

松吉に別れて、半七はまっすぐに神田へ帰ろうと思つたが、自分はまだ一度もその現場を見とどけたことがないので、念のために帰途かえりに市ヶ谷へ廻ることにした。合羽坂下へ来た頃には春の日ももう暮れかかつ

ていた。酒屋の裏へはいつて、格子の外からおみよの家の様子を一応うかがつて、それから家主の酒屋をたずねると、御用で来た人だと聞いて、帳場にいた家主も形をあらためた。

「御苦労さままでございます。なにか御用でございますか」

「この裏の娘の家には、その後なんにも変ったことはありませんかね」

「けさほども長五郎親分が見えましましたので、ちよつとお話をいたして置きましたか……」

長五郎というのは四谷から此の辺を縄張りにして  
る山の手の岡つ引である。長五郎がもう手をつけてい  
るところへ割り込んではいるのも良くないと思つたが、  
折角来たものであるから、ともかくも聞くだけのこと  
は聞いて行こうと思つた。

「長五郎にどんな話をしなすつたんだ」

「あのおみよは人に殺されたんじゃないんです」と、亭  
主は云つた。「おふくろもその当座は気が転倒してい  
るもんですから、なんにも気が付かなかつたんですが、  
きのうの朝、長火鉢のまん中の抽斗ひきだしをあけようとする

と、奥の方に何かつかえているようで素直にあかない  
んです。変だと思つて無理にこじあけると、奥の方に  
何か書いた紙きれが挟まっていたので、引つ張り出し  
て読んでみると、それが娘の書置なんです。走り書き  
の短い手紙で、よんどころない訳があつて死にますか  
ら先立つ不孝はゆるしてくださいというようなことが  
書いてあつたので、おふくろはまたびっくりして、す  
ぐにその書置をつかんで私のところへ飛んで来ました。  
娘の字はわたくしも知っています。おふくろも娘の書  
いたものに相違ないと云うんです。して見ると、あの



おみよは何か云うに云われぬ仔細があつて、自分で首を縊くつて死んだものと見えます。そのことは取りあはず自身番の方へもお届け申して置きましたが、けさも長五郎親分が見えませんでしたから詳しく申し上げました」

「そりやあ案外な事になつたね。そうして、長五郎はなんと云いましたえ」と、半七は訊いた。

「親分も首をかしげていましたが、自滅じゃあどうも仕方がないと……」

「そうさ。自滅じゃあ詮議にもならねえ」

それからおみよが平素ふだんの行状などを少しばかり訊いて、半七はここを出た。しかし彼はまだ腑ふに落ちなかつた。たといおみよが自分で喉を絞めたとしても、誰がその死骸を行儀よく寝かして置いたのであろう。長五郎はどう考えているか知らないが、単に自滅というだけで此の事件をこのままに葬つてしまふのは、ちつと詮議が足りないように思われた。それにしても、おみよの書置が偽筆でない以上、かれが自殺を企てたのは事実である。若い女はなぜ自分で死に急ぎをしたのか、半七はその仔細をいろいろに考えた末に、ふと

思い付いたことがあつた。彼はそのまま神田の家へ帰つて、松吉のたよりを待っていると、それから五日目の午すぎに、松吉がきまりの悪そうな顔を出した。「親分、どうもいけませんよ。あれから毎日張り込んでいるんですけれど、野郎は影も形も見せないんです。草鞋を穿いたんじゃないやありますめえか」

松吉の報告によると、その古着屋も師匠の家もみな平屋の狭い間取りで、どこにも隠れているような場所がありそうもない。古着屋の店にもおふくろが毎日坐っている。師匠の家でも毎日稽古をしている。ほか

には何の変ったことはないと言った。

「師匠の家じゃあ相変わらず稽古をしているんだな。

あそこの家の月浚つきざらいはいつだ」と、半七は訊いた。

「毎月二十日ほつかだそうですが、今月は師匠が風邪を引いたとかいうんで休みましたよ」

「二十日というとおとといたな」と、半七は少しかんがえた。「あの師匠、どんなものを食っている。魚屋も八百屋も出入りするんだらう。この二、三日の間、どんなものを買った」

それは松吉も一々調べていなかったが、自分の知っ

ているだけのことを話した。そうして、おとといの午ひるには近所のうなぎ屋に一人前の泥鰯鍋どじょうをあつらえた。きのうの午には魚屋に刺身を作らせたと云った。

「それだけのことが判つていりやあ申し分はねえじゃあねえか」と、半七は叱るように云った。「野郎は師匠の家に隠れているんだ。あたりめえよ。いくら新宿をそばに控えているからといって、今どきの場末の稽古師匠が毎日店屋物てんやものを取つたり、刺身を食つたり、そんなに贅沢ぜいたくができる筈がねえ。可愛い男を忍ばしてあるから、巾着きんちやくの底はたを掃はたいてせいぜいの御馳走ごちそうをしている

んだ。おまけに毎月の書き入れにしている月浚いさえも休んでいるというのが、何よりの証拠だ。師匠の家にはお浚いの床ゆかがあるだろう」

師匠の家は四畳半と六畳の二間で、奥の横六畳に二間の床があると松吉は云った。床の下は戸棚になってるのが普通である。その戸棚のなかに男を隠まつてあるものと半七は鑑定した。

「さあ、松。すぐ一緒に行こう。彼らは銭がなくなるかと、また何をしでかすか判つたもんじやあねえ」

二人は新宿の北裏へ行つた。

## 四

「おや、三河町の親分さん。先日はどうも御厄介になりました。その後まだお礼にも伺いませんで、なにしろ貧乏暇無しの上に、少し身体が悪かったもんでございますから。ほほほほほ」

杵屋お登久はべんべら物の半纏はんでんの襟を揺り直しながら笑い顔をして半七をむかえた。彼女は松吉が裏口に忍んでいるのを知らないらしかった。半七は奥へ通さ

れて、小さい置床おきどこの前に坐つた。寄付よりつきの四畳半には長火鉢や箆筒や茶箆筒が列んでいて、奥の六畳が稽古場になつてゐるらしく、そこには稽古用の本箱や三味線が置いてあつた。八ツ（午後二時）少し前で、手習い子もまだ帰つて来ない時刻のせいか、弟子は一人も待つていなかつた。

「妹はどうしたね」

「あの、きょうも御参詣にまいりました」

「鬼子母神様かえ」と、半七はお登久の持つて来た桜湯をのみながら苦笑いをした。「なかなか御信心だねえ。」



だが、鬼子母神様を拝むより俺を拝んだ方がいいかも知れねえ。千次郎のたよりはすつかり判つたぜ」

お登久は眉を少し動かしたが、やがて調子をあわせるように、華ほなやかに笑つた。

「ほんとうにそうでございますね。親分さんをお願い申して置けば、それでもう安心なんでございますけれど……」

「冗談じゃねえ。ほんとうにたよりが判つたんだ。それを教えてやろうと思つて、わざわざ下町からのぼつて来たんだぜ。師匠、だれもほかにいやあしめえね」

「はあ」と、お登久はからだを固くして半七の顔を見つめていた。

「師匠の前じゃあちつと云いにくいことだが、千次郎は市ヶ谷合羽坂下の酒屋の裏にいるおみよという若い女と、近所の質屋に奉公している時分から引つからんでいたんだ。お前がふだんから気をまわしている相手というのはその女だ。ところで、そこにどういふ因縁があつたか知らねえが、千次郎とおみよは心中するこゝとになつて、男はまず女を絞め殺した」

「まあ」と、お登久の顔は真つ蒼になつた。「ほんとう

に二人で死ぬ気だったんでしょうか」

「ほんとうも嘘もねえ。真剣に死ぬ気だったんだらう。だが、女の死ぬのを見ると、男は薄情なものさ。急に気が変って逃げ出して、それから何処かに隠れてしまったんだ。死んだ女は好い面つらの皮で、さぞ怨んでい  
るだらうよ」

「二人が心中だという確かな証拠があるんでしょうか」  
「女の書置が見付かったから間違いもあるめえ」

云いかけてふと気がつくとき、お登久の涼しい眼には  
涙がいつぱいに溜っていた。

「その女と心中までする位じゃあ、つまり私は欺されていたんですね」

「師匠にやあ気の毒だが、煎じつめると、まあそんな理窟にもなるようだね」

「あたしはなぜこんなに馬鹿なんでしようね」

もう堪まらなくなつたらしい。お登久はじれるように身をふるわせて、襦袢の袖口を眼にあてた。裏口で犬が頻りに吠え付くのを、松吉は小声で追っているらしかつたが、そんなことはお登久の耳にはちつともはいらないらしかつた。彼女はやがて眼を拭きながら訊

いた。

「それで、千さんの居どころが判つたらどうなるんでしょう」

「相手が死んだ以上は無事に済むわけのものでねえ」

「親分が見つけたら捉つかまえますか」

「いやな役だが仕方がねえ」

「じゃあ、すぐに捉まえてください」

お登久はいきなり起ちあがつて、床の下の戸棚をがらりとあけると、戸棚の隅には若い男の蒼ざめた顔が見えた。案の通りここに隠れていたなと思う間もなく、

お登久は男の手をつかんで戸棚からぐいぐいと引き摺り出した。

「千ちゃん。お前さん、よくもあたしをだましたね。

商売上で少し筋の悪い品を買って、飛んだ引き合いを食いそうになつたから、ちつとの間どこかへ姿を隠すんだと云うから、一昨々日さきおとといからこうして隠まつて置いてやると、そりゃあ丸で嘘の皮で、市ヶ谷の女と心中しそこなつたんだということを今初めて聞いた。今まで人をさんざんだまして置きながら、またその上にそんな嘘をついて……。あんまり口惜くやしいから、あたし

はお前を引つ張り出して親分さんに渡してやる。さあ、縛られるとも、牢へ入れられるとも、勝手にするが好い」

くやし涙の眼を瞋いからせて、お登久は男の顔を睨みつけると、彼はその眼を避けるように顔をそむけたが、その方角にはまた半七の眼がひかっている。彼はもういつそ消えてしまいたいように俯伏して、稜毛のげの逆立った古畳に顔を埋めてしまった。

「もうこうなったら仕方がねえ」と、半七は論さとすように云った。「この芝居ももうこれで大詰めだろう。おい、

千次郎。正直に何もかも云つてしまえ。自身番まで引き摺って行つて、わざわざ引っぱたくのも忌いやだから、ここでみんな聞いてやろうぜ」

「恐れ入れました」と、千次郎はもう生きているような顔色はなかつた。

「お前はあのおみよという女と心中したんだらう。女はおめえが絞めたのか」

「親分、それは違います。おみよはわたくしが殺したのじゃうございません」

「嘘をつけ。女をだますのとは訳が違ちがうぞ。天下の御



用聞きの前で嘘八百をならべ立てると、飛んでもねえことになるぞ。人を見て物をいえ。現におみよの書置があるじゃあねえか」

「おみよの書置には心中とは書いてございません。おみよは自分ひとりで死んだのでございます」と、千次郎はふるえながら訴えた。

半七も少しゆき詰まった。心中というのは自分だけの鑑定で、成程おみよの書置に心中ということは書いてないらしかった。併しおみよとこの千次郎とがどうしても無関係とは思われなかった。

「それじゃあ、てめえはどうしておみよの書置の文句を知っている。おみよの死んだそばにいねえで、それが判る筈がねえ。第一に、おみよが自分一人で死んだということはどうして知っている。訳を云え」と、半七は嵩かさにかかつて極めつけた。

「正直に申し上げます」

「むむ。早く申し立てろ」

そばにはお登久が執念深そうな眼をして睨みつけているので、千次郎も少しためらっているらしかったが、半七に催促されて彼はとうとう思い切つて白状した。

かれは市ヶ谷の質屋に奉公している時から、近所のおみよと不図ふと云い交すようになったが、女は武家の持ち物になつていたので、万一それが露顕したらどんな祟りを受けるかも知れないという懸念から、二人は用心して、月に二、三度位ずつ雑司ヶ谷の茶屋でこつそり出逢つていた。千次郎が新宿に古着屋の店を持つようになったとしても、二人の関係はやはり繋がっていた。そのうちに自分の妹が長唄の稽古に通うのが縁となつて、千次郎は師匠のお登久とも他人でない関係になつてしまつた。そうして、お登久の眼を忍んで、むかしの恋

人にも逢つていた。

これだけでもやがては面倒の種となりそうなところへ、さらにおそろしい面倒が湧き出しそうになつて来た。それは千次郎とおみよとが雑司ヶ谷の茶屋で逢つているところを、大久保の屋敷の者に見つけられたのであつた。この前の妾はなにか不埒をはたらいて主人の手討ちに逢つたとかいう噂を聞いているおみよは、根がおとなしい女だけに、もう生きてゐる空もないようにふるえ上がってしまった。彼女は母と一緒に練馬へゆく途中から逃げて帰つて、約束の茶屋で千次郎に

逢つて、自分の秘密が屋敷に知れた以上は、もう生きてはられないと嘆いた。

その話を聞いて気の小さい千次郎はおびえた。おみよばかりでなく、不義の相手の自分とても或いは屋敷へ引つ立てられて、どんなわざわいに逢うかも知れないと恐れた。しかし彼は女と一緒に死ぬ気にもなれなかつた。おみよから心中の話をほのめかされたのを、彼はいろいろに宥めすかして、その日の夕方にもかくも市ヶ谷の家へ帰らせたが、なんだか不安心でもあるので、彼は途中から又引つ返しておみよの家へたず

ねて行くと、もう遅かった。おみよは台所の梁はりに麻の葉の帯をかけて縊くびれていた。長火鉢のそばに母と自分とに宛てた二通の書置があつた。急いだとみえて、どつちも封をしてなかつたので、彼は二通ながら披ひらいて見た。

あまりの驚きと悲しみとに、千次郎は少時しばらくぼんやりしていたが、やがて気がついておみよの死骸を抱きおろした。その死骸を奥へ運んで頸くびにからんでいる帯をといて、北枕に行儀よく横たえて、かれは泣いて拝んだ。母にあてた書置は火鉢のひきだしに入れ、自分に

あてた書置は自分のふところに押し込んで、彼も女のそばですぐ縊れて死のうと覚悟したが、ここで一緒に死んではかのお登久に済まないような気がしたので、彼は半分夢中でおみよの帯をかかえながら表へそつとぬけ出した。それからどこをどう歩いたか、かれは死に場所を探しながら帯取りの池へ迷って行つた。女の帯で首をくくろうか、それとも池へ身を投げようかと思案しているところへ、あいにくと幾たびか人が通るので、彼は容易に死ぬ機会を見出すことが出来なかつた。陰つた夜で、空には弱い星が二つ三つ輝いている

ばかりであつた。その星の光を仰いでうつとりと突つ立っているうちに、薄ら寒い春の夜風が肌にしみて、彼は急に死ぬのが恐ろしくなつた。彼はかかえていた女の帯を池へ投げ込んで、暗い夜路を一散に逃げ出した。

しかし彼は一種の不安に付きまとわれて、すぐに自分の家へ帰ることも出来なかつた。たとい自分が手をおろして殺したのでないにもせよ、おみよの死について何かの連坐まさぞえを受けるのが恐ろしかつた。大久保の屋敷の祟りもおそろしかつた。質屋に奉公していたとき



の故朋輩もとが、堀の内の近所に住んでいるのを思い出して、千次郎はその足ですぐ堀の内へたずねて行つた。好い加減の嘘をついて、そこに十日ほども忍んでいたが、いつまでその厄介になつてゐるわけにも行かないので、彼は幾らかの路銀を借りてふたたび江戸へ帰つて来た。それはお登久が雑司ヶ谷で半七に逢つた翌あくる晩であつた。

母に対しても、お登久に対しても、かれは正直に打ちあける勇氣がないので、ここでもまた好い加減の嘘を作つて、筋の悪い品物を買つた為にその引き合いを

受けるのが迷惑だから、当分は世間に顔を出したくないと云った。お登久は母と相談の上で、可愛い男を自分の家に隠まつて置いた。その秘密は半七に看破みやぶられたばかりか、あわせて千次郎の秘密までもさらけ出されたので、お登久は急に口惜くやしくなつた。かれは押え切れない嫉妬に眼がくらんで、今まで大事に抱えていた男を半七の前に突き出したのであつた。

「それからどうしました」と、わたしは半七老人に訊いた。

「どうと云つてしようがありませんや」と、老人は笑つていた。「それが心中の片相手ならば下手人げしゅにんにもなりますが、女は自分ひとりで死んだんですから、男は別に構つたことはありません。表向きにすれば、お叱りちやうの上で町役人ちやうにでも預けられるのですが、それも可哀そうでもあり、面倒でもありますから、その場でわたくしが叱つただけで、まあ堪忍してやりましたよ。そこで可笑おかしいのはそれから一と月ほど経ちますとね、お登久と千次郎と仲良く二人づれで私のところへ礼に来ましたよ。男が無事に済んだから好いようなものの、

一旦こつちへ引き渡した以上、もし重い科人とがにんになつたらもう取り返しは付きませんや。それを云つてわたくしがお登久にからかいますと、お登久はまじめな顔をして、女つていうものは皆みんなそんなもんですつて……。ははははははは」





半七捕物帳 08 帯取りの池  
岡本綺堂 著

[\[青空文庫図書カード\]](#)

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

※ 底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：菅野朋子

1999年6月11日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ